

## 「相補的な三角形：世俗、聖性、節度」

レイモン・ゲイ＝クロジエ

私の講演は三つの段階から構成される。第1段階では、『手帖』をもとに、私的な世界を離れて公的な世界に向かい、家族から次第に遠ざかって同時代の文化的・政治的な現在の中に入り込んでいくという、カミュの二重の行程を跡づける。主要な伝記的事実を踏まえながら、『手帖』「第1ノート」の冒頭の調子と方向性を分析するとともに、とりわけ1936年1月に作られた価値体系の図（プレイアード版全集II巻、p. 800）の戦略的な意味を分析する。次に、1937年9月のイタリア旅行の際にカミュにもたらされた、思いがけない啓示（*une révélation inattendue*）あるいは「(神的なものの) 公現（*une épiphanie*）」と私が呼んではばからないものの検討を行う。その前年、中央ヨーロッパへの災いに満ちた大旅行から戻る途中でイタリアに短期間立ち寄った際には、期待を感じさせる印象ではあるものの、駆け足の印象しか抱けなかったカミュであったが、1937年にピサとフィレンツェで彼が記したノートは、幸いにも、彼の本当の自分の発見と、彼の私的・職業的な人生における決定的な転回点のひとつを告げている。光に満ちたイタリアがカミュに示した世俗と神聖の幸福な混合、イタリアの芸術、教会、修道院は、彼を神聖な使命と世俗的な使命の両方の価値に対峙させ、その両方を尊重するようにと導いた。第3段階では、一連のカギとなるテキストをもとに、カミュが、節度（*mesure*）のおかげで、神聖な使命というのが存在する権利をいささかも排除しないまま、彼が本能的・直感的に世俗性（*laïcité*）に付与していた優先権をいかにして維持することができたのかを検討する。